

高校改革の「今」  
Q&A  
進路指導 編

高校が評価する入試改革とは？

高校教員に聞く！

各大学の入試改革について  
高校教員はどう見ているのか？  
アンケートを基に明らかにする。

	英語4技能評価	一般選抜での主体性等評価	大学説明会や高大連携の取り組み	大学への期待
東北地区 公立 A 高校	大学入試（特にAO入試）では、英語による自己表現を積極的に取り入れてほしい。例えば、「高校時代に何をやってきて」「大学入学後に何をやる予定なのか」を、受験生に英語でプレゼンさせることができるかどうかで、大学の社会に対する発信力に違いが生じるのではない。	非常に難しいナイーブな問題だと思う。高校生の面接練習や、入学してくる中学生の面接をしてきた経験から、面接でめだつ、人当たりが上手な生徒だけがよい人材ではないと感じている。主体性等の評価では、「その学部で必要なスキルにつながる経験や資格」を問うことが必要ではないか。そうした必要な力や資格を、入試を通して意識させることは、とても重要。	大学が中心となって、地域の学校などを巻き込みながら、イベントなどを実施している姿を見ると、地域でその大学を支えようとする意識が高まる。大学での熱心な指導が直接感じられると、自信を持ってその大学に生徒を送り出したいと思うようになる。市民や企業も同様で、大学を応援する意識が育つ。	「本学なら、××の研究ができる!」と、もっと研究について、生徒にアピールしてほしい。そうすることが、大学の個性化にもつながるのではない。〇〇大学で、この研究をするために、高校では△△の学習をがんばる」といったように、高校と大学で共に生徒を指導したい。
首都圏地区 公立 B 高校	大学や学部のアドミッション・ポリシーなどと整合性があれば、どのような形態でもよい。というのは、画一的な基準で選抜を行うと、大学や学部の多様性が失われてしまうので。選抜の公正さを追求しすぎると、画一的、機械的な処理となり、各大学・学部の特色に合った選抜にならない。	過去の姿勢に対する評価は評定を用いて、未来の姿勢に対する評価は簡易的なレポート等を提出させて評価する方法はどうか。評価の比重は、各大学のアドミッション・ポリシーによるだろう。レポートについては、公開講座を設けて、その内容をふまえて書くようにするやり方もあるのでは。	国の教育改革について説明した後に、自学の取り組みについて話をしてもらおうと、改革の背景が理解でき、大学の取り組みについて質問がしやすい。特色ある学部が増えているため、生徒と学部の適切なマッチングが難しくなっている。AIを活用した大学情報データベースの構築といったことも必要ではないか。出前講義では、単発ではなく、年間を通し同一の教員が複数回講義を行ってくれる大学がある。生徒が大学で学ぶイメージを持ちやすいので、大変ありがたい。	出前講義などをマーケティングの一環として行うのではなく、高校教育に積極的に関わる姿勢を持ってもらえることが肝要であり、その間を埋めるのが探究活動だと考えている。探究では、「学ぶ技術」が必要だが、高校にはその専門家がいない。各大学には、高校での探究に関わる機会を増やしてほしい。
東海地区 公立 C 高校	資格・検定試験等の受験には、経済的な格差や地域格差が生じる可能性を考慮すると、英語の試験に参考程度「加点」*1する形で活用がよいと思う。	進学後に「何を」「なぜ」学びたいのかを学生に尋ねることで主体性を判断することができるのではないかと。推薦入試では、志望動機等を尋ねているので、それを一般選抜に拡大できないか。ただ、調査書と共に送付する志望理由書等は、事前に担当が指導している場合もあり、ややもすると担任の作文である可能性も。学生自身の意見を直接聞くことをお勧めしたい。	高大連携の取り組みについては、高校の学びが大学や上級学校への学びにつながっているという実感が生まれる内容であれば、生徒の学習意欲を喚起でき、望ましい。	高校の教育現場では、「主体的・対話的で深い学び」が求められているので、大学の出前講義についても、一方通行的な授業ではなく、グループワークや問題解決的な要素を取り入れた授業を行ってもらうことが望ましい。
近畿地区 公立 D 高校	まず、大学として、どのような英語力を求めるのか、詳しく提示してほしい。また、資格・検定試験の受験料負担の軽減策についても考えてほしい。技能の高さを、求められるレベル以上に競う必要はない。外国語や国際系の学部の場合、ハイレベルのスコアであれば個別試験の英語を免除する方法はどうか。それ以外の学部では、一定のスコア・級を「出願資格」にするのがよいのではないかと。	受験生にとって一番公平な評価方法は、大学の基準で面接等を実施することだと思う。調査書の得点化は、高校によって規模や活動の活発さが違うので、公平さを欠く。共通テストで一次選抜を行い、「入学したら何をやりたいか」あるいは「社会人になったら何をやりたいか」についてプレゼンさせるような選考を考えてほしい。	大学入学共通テストの記述式問題の配点や調査書の扱いなどを明確にして、わかりやすく説明している大学は、受験生のことを親身に考えていると感じる。3日間ほど大学をオープンにして、見学したい講義を全て見せてもらったが、学生が本当に熱心に、しかも楽しそうに学んでいる様子がよくわかり、大変参考になった。	「英語4技能」が強調されているが、英語を書いたり話したりするアウトプットの活動においては、その「中身」が肝心。大学はビジネス英会話学校ではないので、「中身」についてどのように指導しているかも高校側に情報提供してほしい。
中国地区 公立 E 高校	生徒の努力が評価されるという意味では、「加点」や「みなし得点化」*2もよいが、個別試験の負担軽減という意味では「試験の代替」*3が望ましい。大学での学びを通して、学生がどのように力を身に付けていったかを継続的に測り、その結果を高校側にも開示してほしい。	一般選抜では、面接や小論文などを課し、受験生が自分の言葉で自身の経験を語れるかどうかを客観的に判断していく方法が一番わかりやすい。それ以外だと、生徒が経験を記入した書類や調査書等を合否判定には使わず、入学後の参考資料とする方法がよいように思う。高校では自身を振り返る活動を充実させているので、大学ではより高度な振り返りを行えるようにしてほしい。	説明会で、学問領域について楽しそうにプレゼンされている大学教員の話を知っていると、進学を勧めたい生徒の顔が浮かんでくる。一方で、パワーポイント資料を配布して、一方的にその説明だけをされると、内容が頭に入ってこない。出前講義も同じで、グループワーク形式で、生徒に新しい発見を促すようなものだ、その先生の下で学びたいという生徒の感想が多い。	高大接続では、高校と大学の学びの擦り合わせが必要だが、それには教える側の目線合わせは欠かせない。高大で教員同士の交流を深める機会があればと考えている。
九州地区 私立 F 高校	英語の資格・検定試験は、各大学、学部、学科のアドミッション・ポリシーに基づいて活用すべきだと思う。例えば、必要に応じて個別試験で課すようにするなどの方法もあるだろう。	一般選抜では、募集人員が少ない募集単位や、段階的な選抜で評価に取り入れるなど、評価の検討が十分に行える規模で実施してはどうか。学力では測れない部分を判断することは難しいと思うが、大学での学びに積極的に取り組む学生を入学させるためにも、合否の判断に必要な要素として積極的に取り入れてほしい。	説明会では、大学からの説明の後に情報交換の場を設けるなどして、高校側から大学へ要望を言いやすい状況をつくってもらえると、ありがたい。大学生と一緒に普段の授業を一緒に受ける、説明が上手な学生を使ったりして、大学での授業のおもしろさを生徒に伝えるといった取り組みは、高校側としてはとても助かる。一方で、大学の先生が自分の専門をとうとうと語るだけの出前講義は改善してほしい。	それぞれの大学・学部・学科の特性に合った学生がきちんと入学できるように、入試を工夫したり、大学での学びを高校生に伝えたりして、ミスマッチがないようにしてほしい。そのためにも、大学側はしっかりと自学の特徴を伝えてほしい。加えて、高校生が大学を知る機会を増やし、どの地域に住んでいても公平に知ることができる仕組みを、高校と大学、そして国が一体となって考えたい。

\*1 スコア・級に応じて英語試験の得点に加算 \*2 一定のスコア・級を保持している場合、入試で一定の得点を取ったとみなし、英語試験の得点と比較して得点が高いほうを選抜に用いる  
\*3 独自試験を行わず、英語外部検定試験のスコア・級を得点に換算して選抜に用いる

替」が望ましい（E高校）などといった受験生の負担増加への配慮を求める意見が見られる。

一般選抜での主体性等評価に関しては「非常に難しいナイーブな問題」（A高校）としつつも、「合否の判断に必要な要素として積極的に取り入れてほしい」（F高校）との意見が見られた。評価方法としては、面接や小論文等の活用が挙げられている。また、「過去の姿勢に対する評価は評定を用いて、未来の姿勢に対する評価は簡易的なレポート等を提出」（B高校）という、複数の観点による評価を期待する声もあった。

大学説明会に関しては、「国の教育改革について説明した後に、自学の取り組みについて話してもらおうと改革の背景が理解でき、大学の取り組みについて質問がしやすい」（B高校）という声がある。

高大連携については、一方的な講義ではなく、「グループワーク形式で、生徒に新しい発見を促すようなもの」（E高校）が期待されている。また、地域の活性化に率先して取り組む大学の姿は、「大学を応援する意識」（A高校）を醸成する。

いずれにせよ、変わりつつある高校教員に積極的に関わる連携が、大学には求められている。

大学で求められる力に  
高校教員は注目

現在、多くの大学が2021年度入試に関する予告を発表している。これらの情報を高校現場はどう受け止めているのか。何人かの高校教員に率直に聞いてみた。

英語4技能評価に関しては「アドミッション・ポリシーなどと整合性があればどのような形態でもよい」（B高校）という意見があるように、入試での活用方法というよりも、「大学としてどのような英語力を求めるのか」（D高校）を重視する傾向が見てとれる。現状、英語外部検定試験の活用の有無のみを発表している大学が少なくないが、「自学の学びで必要な英語力」を基に、入試での活用方法を考える必要があるだろう。

ほかにも「経済的な格差、地域格差が生じる可能性を考慮すると英語の試験に参考程度「加点」がよい（C高校）との意見や、「負担軽減という意味では『試験の代